

平成12年 4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町1-684 Tel.0428-23-6859)

## 棒 屋

「棒屋」……いったい何をする仕事なの？この仕事も、そう聞かれそうだ。棒、つまり鍬や鎌の柄を作って上げる仕事である。鍛冶屋は、よく話題にのぼるが、棒屋が注目されることは少ない。鍬や鎌も包丁も鉋も、先の鉄の部分だけでは道具として成り立たない。にもかかわらず、棒屋は、ともすれば忘れられがちな存在である。いろいろな職人を取り上げた本の中にも、棒屋は見掛けない。

しかし、西分一丁目に店を構える「山崎棒屋」は、五代も続いている棒屋なのである。五代というと、ざっと考えても、150年。幕末ごろには営業していたと思われる。

現当主の善次郎氏（昭和9年生まれ）は、父の直太郎氏（明治31年生まれ）に技術を学んでいる。山崎家は以前は半農半工で農業のかたわら棒屋を営んでいた。

鍬や鋤など、力を入れる道具の柄は、堅い樫や欅で作られる。八割が樫だそうだ。特に白樫は、細工しやすいそうで、包丁や鎌などの柄には、軽い朴が使われる。

樫は、原木で3年ねかせ（乾燥させ）、製材してから2年ねかせて、初めて使う。欅は、完全乾燥に10年かかるそうである。

作業は製材所で六尺ぐらいの長さにした板を、細長く切る。このとき目が通って（柁目）いないと、割れたり折れたりしてしまう。（太さは用途による）次に鉋で角を削っていく。柄は、真ん丸ではなく楕円形が多い。我が家にも、山崎家で作られたと思われる三木鍬と平鍬などがある。三木鍬の柄は長さ1.5m、直径2.5～3cmであった。平鍬は、長さ1m直径3～3.5cmである。

鉋で削る作業は、手作業なので、鍬の柄なら一日に5～6本ぐらいしか作れないという。

鉋で削られ、やすりに掛けられた柄は、すべすべの美しい肌になるこれを、鍬の「しつ」とよばれる四角い穴に指し込む。または「こみ」とよばれる舌状の部分に固定する。

山崎氏の仕事は、広い板の間で、端に直径20cmほどの低い台がある。そこに柄を当てて鍬などの柄を削る。かなり力のいる仕事だということである。

「東京の職人」という本に、府中の野鍛冶相原丈三氏あいはらたけぞうが載っているが、棒はなかった。

相原氏に尋ねたところ、やはり近所に棒屋があったそうだ。しかし、仕事の激減で、今はほとんど廃業状態だそうだ。相原氏は、田無の「棒とみ」という大きな棒屋に頼んでいるという。

柄にする木は、長い乾燥期間を必要とするので、在庫が大量にいる。山崎氏の裏の物置にも、樫、欅などの材木が山と積まれていた。

しかし、最近では、農家でも鍬を使うことが少なくなり、仕事は多くないという。

また、おもしろいことに、棒屋のとなりに鍛冶屋が店を並べている。山崎鍛冶屋である。鍛冶屋で売ってもらった鍬などは、すぐとなりの棒屋で柄を上げてもらえる。

棒屋と鍛冶屋が、となり合わせで店を構えているのは、大変珍しいそうである。

(文責 小川)